

阿 Q の精神勝利法

——国民性説と人間心理説をめぐって

李 爲民

1. はじめに

魯迅の代表的小説『阿 Q 正伝』は 1921 年 12 月 4 日から 1922 年 2 月 12 日まで『晨报副刊』に連載された。作品は九章からなる。第二章「勝利の記録」、第三章「続勝利の記録」では、敗北という事実を認めず、精神的勝利によって優位に立ち、自己満足する主人公阿 Q の姿が描かれている。

阿 Q の精神勝利法について、丸尾常喜は、精神勝利法を「魯迅が奴隷精神の核心として見いだしたものであり、国民性の恥辱的な病根であったのである」¹としている。李濱英は、阿 Q を「辛亥革命前後に暮らしている、遅れて目覚めていない農民の姿」²と捉え、「彼（阿 Q、筆者注）には中国人の国民性の弱点とりわけ精神勝利法が集約されて表れている」³とする。一方、竹内実は、「この精神上の勝利法というものについては、魯迅は否定的ですけれども、わたしは民衆というものはそういうものによって、ときとして支えられて生きているのではないか、というふうに考える。もし民衆からこれをとり去ったら、それはもう生きていくすべがない」⁴とし、精神勝利法に合理性があると述べている。王富仁は、精神勝利法を「本質上は個人感情への抑制である」⁵とし、「発散できない苦痛への自己解消法であり、その苦痛を耐える『優れた心理対策』である」⁶と指摘している。

このように、阿 Q の精神勝利法に関しては、二つの対照的な論説が見られる。一つは、阿 Q の精神勝利法は国民の悪い根性であるという国民性説である。もう一つは、阿 Q の精神勝利法は人間の心理から現れるものとする、人間心理説である。本稿は、国民性説と人間心理説、二つの論説の原点を考察し、阿 Q の精神勝利法の構造を解明する試みである。最初に、文学者である蘇雪林⁷より提唱された国民性説と、教育研究者である林漢達⁸が注目した人間心理説について確認しておきたい。

2. 国民性説

阿Qの精神勝利法を国民の悪い根性であると主張した最初の人物は蘇雪林である。蘇雪林は、論文『阿Q正伝』及魯迅創作的芸術⁹（1934年）で、『阿Q正伝』の主題について「暗に中国民族の普遍的な悪い根性をさす」¹⁰と捉え、阿Qが表す中国人の悪い根性を四点挙げている。その内容は以下のようなものである。

第一に、卑怯である。阿Qは、喧嘩の相手を見る。口下手と見れば怒鳴りつけ、力が弱いと見ればぶん殴る。村人「ヒゲの王」に負けると、「君子は口を動かすも手を動かさず」（105頁）¹¹と言う。「ニセ毛唐」がステッキを持って近寄ると、首をすくめて待ちかまえる。一方、力が弱い小Dに対しては挑発的な行動に移る。さらに無抵抗の若い尼さんにも手を出してからかう。

第二に、精神勝利法である。阿Qは、喧嘩して負かされると、「おれはまあ、せがれに殴られたようなものだ、今の世の中はまったくなくなったらん……」（100頁）と考える。それで満足して勝ったかのように引きあげる。

第三に、日和見主義である。阿Qは本来革命を憎んでいたが、辛亥革命の波紋が未荘にまで広がり、趙秀才などが辮髪を巻きあげて革命に賛同するのを見て、阿Qは憧れ、革命党に降参しようとする。しかし、彼の目的は自分の利益のためであり、革命の意味についてはまったく分かっていない。

第四に、誇大妄想・尊大な性癖である。阿Qは身分が低いにもかかわらず、未荘の村民をさげすむ。趙旦那の息子が秀才に合格したことに対して、阿Qは心から敬意を払わない。「おれの息子ならもっと偉くならあ」（99頁）と考えるわけである。

精神勝利法については、蘇雪林は、論文の中で「中国人の精神勝利法は早くから存在していたが、のちの異民族との戦いで敗れたことによって、この方法がさらに広く利用されるようになった」¹²と述べている。すなわち、精神勝利法は中国人の内部で形成された気質であることを明言している。さらに、蘇雪林は、阿Qの精神勝利法は「最も卑劣」¹³であると厳しく批判している。

阿Q典型を中国人の国民性と結びつけて考察し批判する蘇雪林の解説は、阿Q論に大きな影響を与えた。李何林の「魯迅の言う国民性または改革しようとする国民精神は、たとえば『阿Q正伝』において指摘され批判された精神勝利法もその一つである」¹⁴、陳兆福、丁仁武の「（阿Qの）『精神勝利法』は国民性を表す重要な点である」¹⁵との批評のように、今に至るまで論じられている。

しかしながら、阿Qの精神勝利法を「国民の悪い根性」、あるいは国民性に見なした場合、その論拠は何かという疑問が出てくる。つまり、阿Qの精神勝利法が国民性であることを明らかにする必要がある。この内容について前記の蘇雪林の論文では明らかにされていない。

ここで、中国人の国民性について見ておきたい。手掛りとして、社会心理学者である沙蓮香の『中国民族性(2)——中国人性格的文化研究』¹⁶がある。沙蓮香はアンケート調査から中国の国民性について分析を行なった。

調査の結論から、沙蓮香は、「古い歴史を持つ中華民族の文化は、代々子々孫々に深く蓄積され、その上知らず知らずのうちに感化されている。そして代々に体現されるこの文化的な蓄積は、われわれ民族固有の性格」¹⁷であり、「中国文化の蓄積の結果、中国人特有の民族的性格をつくりあげた」¹⁸と指摘し、文化によって国民性が形成されたことを論じている。

さらに、中国人の民族性あるいは国民性について、沙蓮香は、中国文化の根底が儒教と道教にあり、中国人の性質には、婉曲であり虚偽、ユーモアがあり狡猾、楽観的であり自己満足、微笑みながらもくろむ、親切でありながら冷淡などが巧妙に結びついて、時・所・人によって変わるといった特徴がある、と述べている。

儒教は仁を根本とする政治・道徳を説く。儒教の根本思想である「修己治人」、すなわちわが身に道徳修養を積み、それによって人を治めるという教えと言われるように、倫理・政治に精進することを主張している。それに対して道教は不老長生をめざし神仙になることを求め、天上に往来する神仙思想などの信仰を説く。長い歴史の中で、浮世をたつ儒家思想と、俗世を超越する道家思想が結びつくことにより、立身出世指向と遁世指向の二重意識が国民性の内部で成立しているとされる。

つまり、沙蓮香が述べるように、中国人の国民性の土台に儒教と道教があることがわかる。阿Qの精神勝利法に儒・道思想による要因があれば、国民性説が成立するのである。しかし、『阿Q正伝』の内容からはその点を指摘することができなかつた。詳しくは本稿第四節「阿Qの精神勝利法の構造」で述べることにする。

3. 人間心理説

蘇雪林より提唱された国民性説に対して、人間の心理から阿Q典型における

考察を試みたのは、林漢達である。林漢達は1940年に論文「阿Q的勝利——心理衛生」¹⁹を發表した。この論文は、異常心理、適応機制、心理衛生の方法、結論から構成される。阿Q典型について林漢達は次のように述べている。

阿Qの内面では心理の衝突を解消する適応機制ができています。適応機制には、合理化・投射・退行・補償・幻想という五つの働きがある。異常心理の人間は環境に応じて適応機制を働かせ、都合のよい行動をとる。適応機制が頻繁に働くから阿Qの心理は異常である。阿Qの異常な心理状態、または適応機制は、心理・行動上の問題を抱えた児童にも見られる。そのような児童の症状から、恥ずかしがりや・臆病・恐怖症・怒りっぽい・嘘つき・言うことを聞かない、という六つのタイプに大別している。

林漢達は、上の六つのタイプの形成原因を分析し、問題行動を起こす児童に適する心理衛生の方法を示している。結論として次のように論じている。

魯迅小説の阿Qは、架空の人物であるかもしれないし、実在した人物であるかもしれないが、形象化した異常心理の典型人物とすることができる。精神分析学者が言った合理化・投射・退行・補償・幻想などの適応機制がほぼできています。環境の圧迫、内面の衝突から阿Qが狂人にならないのは、適応機制によるものである。しかし、彼は、不健康的適応機制にばかり頼って、心理的衛生管理が分らないため、異常人格の弱者となっている。²⁰

内容から見れば、林漢達の論文は、阿Q論というより、フロイトの精神分析から児童の心理問題を解決することを目的とするものである。20世紀20、30年代にフロイトの精神分析が中国で盛んに紹介されていた。精神分析学を芸術や文学の理解や批判に援用する動きもあったという。²¹ 林漢達の論文は、このような学問的背景で書かれたものと考えられる。林漢達の論文は、阿Q典型に関する展開が不十分と言わざるを得ないが、心理学から阿Qの心理に着目する点では阿Q論における人間心理説の先駆と言えるものである。

人間心理説は、圧迫された歴史を持つ外国文学者の発言にも表れている。1956年10月19日北京で魯迅逝去20周年記念式典が行なわれた。グアテマラ文学者でのちにノーベル文学賞を受賞したミゲル・アンヘル・アストゥリアス（1899～1974）は、式典での演説の中で精神勝利法の普遍性を以下のように語っている。

「阿Q主義」あるいは「精神上の勝利」は、われわれが支配者と戦う際、

われわれがおかれる立場を見極めることを妨げます。したがって、今はそれをかなぐり捨てる時期なのです。この恥ずべき人物（阿Q）は、天才的に創造され、国境を越え、われわれラテンアメリカの各民族にも応用できます。そのような人々は、阿Qと同じような立場におかれて成り行きに任せ、支配階級に対して奴隷の束縛から抜き出そうともせず、精神上的勝利によって自ら慰めます。²²

同様な見解は、インドの作家マニック・バナジー（1908～1956）が式典に寄せた文章にも述べられている。

阿Qの気質、心理状態、自分あるいは他人に対する軽蔑、自分を傷つけるものへの健忘、自ら失敗を慰める「精神勝利法」、これらは支配される民衆が共有するものである。阿Qという名前は中国のものであるが、この人物をわれわれのインドでも見かける。²³

ミゲル・アンヘル・アストゥリアスとマニック・バナジーの発言は、阿Qの精神勝利法に注目しており、支配されることによって自ら慰める行為である精神勝利法が、ラテンアメリカ、インドの民衆にも弱点として見られることを示唆している。阿Qの精神勝利法は中国人だけの特殊な国民性ではないことが明らかになる。では、阿Qの精神勝利法は人間に共通する心理なのであろうか。次に精神勝利法の構造を見ることにする。

4. 阿Qの精神勝利法の構造

前述したように、阿Qの精神勝利法論には国民性説・人間心理説という二つの論説があることがわかる。国民性説によれば、阿Qの精神勝利法は中国人の悪い根性あるいは国民性である。それに対して、人間心理説からは精神勝利法の普遍性が指摘されている。ここに矛盾が生じている。この矛盾を解明するには、まず阿Qの精神勝利法の構造を明らかにする必要がある。

『阿Q正伝』第二章「勝利の記録」、第三章「続勝利の記録」から阿Qの精神上的勝利の記録を見てみよう。阿Qの精神上的勝利の記録が場面別に次のように描かれている（括弧内は小説の該当章である）。

場面一。阿Qは未荘という村の土地廟に住み、日雇いの仕事をしている。彼の頭にハゲがある。だからハゲに関係したことを言われると、怒る。それが面白いので、村中の閑人は余計からかう。相手が弱いと見ると、阿Qは喧嘩を売

る。しかし、大抵は負かされてしまう。負けると阿 Q は、「おれはまあ、せがれに殴られたようなものだ、今の世の中はまったくなくなっらん……」(100 頁)と心の中で考え、そこで「満足して意気揚々と引き上げる」(100 頁)(第二章「勝利の記録」)。

場面二。阿 Q は心の中で考えたことをつい口に出してしまう。彼をからかう閑人は、彼の辮髪をつかんで、「阿 Q、これは、せがれがおやじを殴るんじゃないぞ、人間さまが畜生を殴るんだぞ。自分で言ってみろ、人間さまが畜生を殴るんだと」(100 頁)と言い、彼の頭を壁に叩きつける。阿 Q は、辮髪の根元を押さえ、「虫けらを殴るのさ、どうだい？おれは虫けらさ、——これでもいけねえかね？」(101 頁)と言う。やられた末、阿 Q は、「われこそは、われとわが身を軽蔑できる第一人者だと」(101 頁)考え、「満足して意気揚々と立ち去る」(101 頁)(第二章「勝利の記録」)。

場面三。阿 Q は賭博で珍しく勝つ。しかし、せっかく勝った大金をさらわれてしまう。このときばかりは敗北の苦痛をなめるが、阿 Q は、右手を上げて自分の頬に二、三回つづけてビンタを食らわせる。殴ったのが自分で、殴られたのはもう一人の自分のような気がして、「満足して意気揚々と横になる」(102 頁)(第二章「勝利の記録」)。

場面四。阿 Q は、自分の姓は趙で、村の顔役である趙旦那と同族だと言い出す。それを知った趙旦那は、「出まかせを言いおって。わしに貴様みたいな親戚がいてたまるか、貴様の姓が趙だというのか？」(95 頁)と、怒って阿 Q にビンタを張る。殴られた阿 Q は、「今の世の中はまるでなっていない。せがれがおやじを殴る……」(103 頁)と考え、権威ある趙旦那を自分の息子だと思い、「だんだん得意になって」(103 頁)くる(第三章「続勝利の記録」、内容上第一章の引き続き)。

次の表 1 は上の内容を整理したものである。

表1 阿Qの精神勝利記録

	場面一 (第二章「勝利 の記録」)	場面二 (第二章「勝利 の記録」)	場面三 (第二章「勝利 の記録」)	場面四 (第三章「続勝 勝利の記録」)
敗北 (事実)	閑人に喧嘩し て殴られる	閑人に頭を叩 きつけられる	博打で勝った 大金をさらわ れる	趙旦那にビン タを食らう
阿Qの精 神的勝利 (空想)	「おれはま あ、せがれに 殴られたよう なものだ・・・」 と考える	「おれこそ は、われとわ が身を軽蔑す る第一人者」 と考える	自分の頬にビ ンタをくれ、殴 ったのが自分 で、殴られたの はもう一人の 自分のような 気がする	「今の世の中 はまるでなっ てない。せがれ がおやじを殴 る・・・」と思 う
満足感 (結果)	満足して意気 揚々と引き上 げる	満足して意気 揚々と立ち去 る	満足して意気 揚々と横にな る	だんだん得意 になってくる

表1の内容から、阿Qの精神勝利法を次のように考察することができる。殴られることや、負かされることが、阿Qにとって敗北である。敗北によって、精神的勝利へ発展する。敗北は、既成事実である。精神的勝利の前提とも言える。言い換えればこの敗北という前提がなければ、精神的勝利への発展はできないのである。「おれはまあ、せがれに殴られたようなものだ」や、「おれこそは、われとわが身を軽蔑する第一人者」、自分の頬にビンタを食らわせ、殴ったのが自分で、殴られたのが自分の分身だというように考えること、「今の世の中はまるでなっていない。せがれがおやじを殴る・・・」、これらは敗北した阿Qの精神的勝利の発想である。実現する可能性がないことから空想と言ってもよいであろう。このような発想によって、阿Qは、精神的勝利を得る。精神的勝利を得た阿Qは、「満足して意気揚々と」する。「意気揚々」は精神的勝利を得てからの表出であり、精神的勝利への発展の結果である。

このように、阿Qの精神勝利法は敗北、精神的勝利、満足感という三つの段階によって展開する。敗北は既成事実であり、前提である。精神的勝利は空想であり、仲介役である。満足感はその表出であり、結果である。敗北、精神的

勝利、満足感が阿 Q の精神勝利法の構造における三つの要素であると言えることができる。

阿 Q の精神勝利法は、阿 Q の際立った特徴とされている。しかし、阿 Q の言動の全てを精神勝利法に還元できるのだろうか。ここで、原作第三章「続勝利の記録」に描かれる阿 Q の二つの屈辱的な事件を見ることにする（括弧内は小説の該当章）。

まずは、村人である「ヒゲの王」が日向でシラミを取っているのを見て、阿 Q もシラミを取る。軽蔑している相手よりも自分のシラミのほうが少ないので、自尊心を傷つけられた阿 Q は、喧嘩を売る。ところが、物の数でないと思った相手に殴られてしまう。相手の腕力に意外な思いをした阿 Q は、「皇帝が科挙を廃止して、秀才も挙人もいないことになったため、それで趙家の威光もなくなったというのだろうか」（105 頁）と、戸惑う。負けたことで怒りに燃える阿 Q は、通りかかる「ニセ毛唐」について罵声を浴びせる（第三章「続勝利の記録」）。

次は、「ヒゲの王」との喧嘩に負けたところ、阿 Q の嫌いな「ニセ毛唐」が通りかかる。腹立ちまぎれに「ニセ毛唐」に罵声を浴びせ、逆にステッキで殴られる。阿 Q は、身体を固くし、首をすくめて、「ニセ毛唐」のステッキ攻撃を待ちかまえる。殴られたあと、阿 Q は、「一件落着のようなもので、かえってさっぱり」（107 頁）する。そして通りかかった若い尼さんをからかう（第三章「続勝利の記録」）。

次の表 2 は上の内容を整理したものである。

表 2 阿 Q の二つの屈辱的な事件

	第一の屈辱的な事件 (第三章「続勝利の記録」)	第二の屈辱的な事件 (第三章「続勝利の記録」)
受けた 屈辱	「ヒゲの王」とシラミ取り競争をし、相手に喧嘩を売ったが、殴られる	「ニセ毛唐」に悪口を言ったため、殴られる
阿 Q の 反応	「ヒゲの王」の腕力が意外である。負けたことに怒りに燃える	身体を固くし、首をすくめて殴られるのを待ち構える
結果	通りかかる「ニセ毛唐」に罵声を浴びせる	一件落着、さっぱりする。若い尼さんをからかう

上述の内容によって、阿Qの二つの屈辱的な事件について、次のように考察することができる。「ヒゲの王」、「ニセ毛唐」に殴られることは、阿Qにとって屈辱である。力不足で負けたことから敗北とも言える。屈辱を受けた阿Qの反応を見ると、第一の屈辱的な事件では、阿Qは、意外であり、困惑の様子を表す。「ヒゲの王」に負けた怒りを抑えきれず、つい「ニセ毛唐」に悪口を言ってしまう。第二の屈辱的な事件では、阿Qは、殴られることを待ち構える姿勢である。殴られてさっぱりした気分である。気をはらすため、若い尼さんをかからかう。阿Qは、このように屈辱や敗北を味わうが、精神的勝利を得ることや、空想することは行なわれない。阿Qは、「ニセ毛唐」に悪態をつくこと、若い尼さんをかからかうことによって不満を転嫁するが、満足感を表さない。

阿Qの二つの屈辱的な事件は、敗北という精神勝利法の構造の三要素の一つを満たすが、精神的勝利または空想、満足感を示さないことから精神勝利法に当てはまらないと思われる。阿Qの精神勝利法は、阿Qの際立った特色であるが、彼の行動が全てそれに還元できるとは言えない。

以上、阿Qの精神勝利法の構造を見てきたが、どうして阿Qはこのような心理活動をとるのだろうか。人間の心理構造を知る手掛りとして、南博²⁴の分析がある。

南博は『社会心理学入門』²⁵で、人間の心理について次のように述べている。人間は、社会生活の中でいろいろな社会行動をしている。社会的な枠の中で一定の社会行動に駆り立てる心理的原動力を欲求とよぶ。人間は、食欲のような生命を保つための欲求から、生命をかけることも惜しまない愛情や名誉心などにいたる、さまざまな欲求を持っている。しかし、社会生活の中でいろいろな欲求を勝手気ままに満足させるわけにはいかない。社会生活をする以上、他人との折り合いで、欲求の満足がなかなか得られない。そのような欲求不満の状態が長く続くと、人間は欲求不満を生む社会環境そのものから逃避しようとする。逃避は、現実的な欲求満足のかわりに、非現実的な世界で、代償的に欲求を満足させる行動である。しかし、逃避は一時的なものである。子供のような、欲求を満足させる能力を持たないものには空想への逃避がよく試みられる。

『阿Q正伝』には「麦刈りなら麦刈り、米搗きなら米搗き、舟こぎなら舟こぎと」(98頁)という描写があり、阿Qがある程度の社会生活をしていることが推測される。村のある老人の「阿Qはまったくよく働く」というほめことば

から、阿 Q に労働の欲求があることがうかがえる。趙旦那の息子が秀才の試験に合格したと聞いて、趙家の同族であると自分で決めていた阿 Q は、自分にとっても名誉だと、躍り上がって喜ぶ。「阿 Q はまた気位が高く、未荘の村民などまったく彼の眼中に」(98 頁) ない。阿 Q には名誉心、自尊心がある。このように、阿 Q は、日雇いの暮らしをして、正常な心理の持ち主である。

ところが、阿 Q は村人とのあいだでよくトラブルを起こす。趙家の同族と名乗って、趙旦那に怒りを買って、ビンタを食らう。頭にハゲがあって周囲からかわれる。閑人と喧嘩して、辮髪を引っ張られ叩きつけられる。賭博で勝ったお金をさらわれる。「ヒゲの王」、「ニセ毛唐」らに殴られる。趙家の使用人呉媽への求愛によって大騒ぎとなり、趙家の息子趙秀才に殴られ、趙家への出入りを禁じられる。村の女たちに嫌われる。仕事を打ち切られる。革命の仲間に入れてもらえず、革命の参加を許されない。阿 Q の暮らす未荘というところは、阿 Q にとって欲求(阿 Q の欲求がいいか悪いかは別として)を満足させる環境ではない。阿 Q の欲求不満を生む場所と言ってよいだろう。この社会環境では、阿 Q は生きるのが苦痛であろう。欲求不満の現実から非現実的な世界へ逃避するのが人間の心理であれば、いつも敗北する阿 Q は精神的勝利の世界を求めのが当然であろう。その精神的勝利を得るために、阿 Q は空想する。つまり、阿 Q の精神勝利法は、空想による一種の非現実的な自己満足であり、前記の南博が言う逃避という人間の心理に合致すると思われる。

このように、人間の心理から阿 Q の精神勝利法を考察すれば、その合理性を認めざるを得ない。つまり阿 Q は、食欲、名誉心といった欲求を持つ人間なのである。社会生活の中で欲求不満が生じ、欲求不満の環境から逃げ出そうとする。逃げ出す方法として、空想である。空想で非現実的に欲求を満足させる。阿 Q の精神勝利法はその人間の心理から現れるものである。冒頭に引用した、精神勝利法は民衆の生きるすべであろうという竹内実論の根拠がここにあると思われる。また、鄒永常の「人間は生命が尊いものである。生き方が、人に害さえ与えねば、肯定すべきものである。したがって、阿 Q の精神勝利法は弱者の生きる知恵である」⁵⁾という論も同調のものである。阿 Q の精神勝利法は自己満足・自己欺瞞であるが、人に害をなさない。この点において、精神勝利法を完全に否定的なものとする見解は首肯しかねるのではなかろうか。

確かに阿 Q の精神勝利法の構造に儒家思想のかけが見える。例えば、阿 Q の「おれはまあ、せがれに殴られたようなものだ」という発想である。儒教は「三

綱」、すなわち君は臣の綱、父は子の綱、夫は妻の綱を唱え、人間として君臣・父子・夫婦の秩序を守ろうとする。阿Qは、これをもって他人の父親になって殴った相手への恨みを晴らす。しかし、「三綱」によって前述のように阿Qの精神勝利法の発生原因・経過・結果を論じるには飛躍がある。

5. おわりに

以上、阿Qの精神勝利法について、「国民の悪い根性」とする国民性説と、普遍性を論じる人間心理説が対照的に提起された。国民性説と人間心理説に矛盾がうかがえる。本稿はその矛盾を解決しようと試みた。

沙蓮香は、民族性の形成される原因が文化にあり、とりわけ中国人の民族性の形成が儒家思想・道家思想にあると示していたが、阿Qの精神勝利法の構造分析によって、精神勝利法は儒家思想・道家思想によるものではないことが判明した。

また、阿Qの精神勝利法が、敗北、精神的勝利、満足感という三つの要素から構造されている点について指摘した。精神勝利法は、阿Qの際立った特徴であるが、二つの屈辱的な事件について分析した結果、一貫して阿Qの言行を決定するものではないことが明らかになった。つねに敗北する阿Qは精神勝利法によって自己満足する。社会心理学によれば、それは欲求不満の現実から非現実的な世界への逃避である。したがって、阿Qの精神勝利法は人間の心理の表れであると考えられる。

『阿Q正伝』の執筆について、魯迅は次のように語っている。「書くには書いてみたものの、わたしがほんとうに、現代のわが国の人々の魂を描くことができたかどうか、結局のところ、自分にはまだ、しかとした自信がない」²⁷。魯迅自身の言葉が示しているように、阿Qを通して魯迅が描こうとしたのは、前近代の社会に生きる中国人の精神であった。しかし、前述したように、阿Qの精神勝利法は中国人の特殊な国民性とは結びつかないという矛盾が生じる。では、阿Qが示す中国人の精神構造とは何であろうか、詳細な検討は今後の課題としたい。

注

- 1 丸尾常喜『魯迅——花のために腐草となる』、集英社、1986年、161頁。
- 2 李濱英「従『阿Q正伝』看魯迅的国民性思想」、『学术交流』第4期、1997年、91

- 頁。
- 3 同上。
 - 4 竹内実『魯迅遠景』、田畑書店、1978年、113頁。
 - 5 王富仁『中国反封建思想革命的一面鏡子——「呐喊」「彷徨」綜論』、北京師範大学出版社、1986年、56頁。
 - 6 同上。
 - 7 蘇雪林（1897～1999）は浙江省生まれ、本名蘇梅、字は雪林、筆名に綠漪などがある。1921年にフランスへ留学、帰国後大学講師に勤め、散文集『緑天』（北新書局初版、1928年）、小説『棘心』（北新書局初版、1929年）を出版し、反響をよんだ。文学評論にも手がけていた。
 - 8 林漢達（1900～1972）は、浙江省出身、教育者・歴史学者である。1937年にアメリカのコロラド州立大学に留学、教育学博士。著書に『西洋教育史講話』、『三国故事』などがある。
 - 9 蘇雪林『『阿Q正伝』及魯迅創作的芸術』、中国社会科学院文学研究所魯迅研究室編『1913～1983 魯迅研究學術論著資料匯編』第1巻、中国文聯出版公司、1985年、1035～1044頁。初出は『国聞週報』第11巻第44期、1934年11月5日。
 - 10 前掲蘇雪林『『阿Q正伝』及魯迅創作的芸術』、1035頁。
 - 11 引用は丸山常喜訳『阿Q正伝』（『魯迅全集』第2巻、学習研究社、1984年、105頁）による。以下、本稿における『阿Q正伝』からの引用は同記に依拠し、引用文に続けて頁数を括弧に入れて示す。
 - 12 前掲蘇雪林『『阿Q正伝』及魯迅創作的芸術』、1036頁。
 - 13 同上。
 - 14 李何林「從『国民性』問題談『阿Q正伝』」、鮑晶編『魯迅「国民性思想」討論集』、天津人民出版社、1982年、338頁。
 - 15 陳兆福、丁仁武「論国民性表現的層次与角度——『阿Q正伝』文本思想再解讀」、『山東文学』第7期、2006年、53頁。
 - 16 沙蓮香『中国民族性（2）——中国人性格的文化研究』、三聯書店（香港）有限公司、1999年。
 - 17 前掲書、前言。
 - 18 前掲書、11頁。
 - 19 林漢達「阿Q的勝利——心理衛生」、中国社会科学院文学研究所魯迅研究室編『1913～1983 魯迅研究學術論著資料匯編』第3巻、中国文聯出版公司、1987年、186～192頁。初出は『中美週刊』第2巻第2、3期、1940年9月28日、10月5日。
 - 20 前掲林漢達「阿Q的勝利——心理衛生」、192頁。
 - 21 フロイトの精神分析の中国受容について、石向実「弗洛伊德精神分析学説在中国」光明日報社編『博覽群書』オンライン版2008年5月7日より。
URLはhttp://www.gmw.cn/02blqs/2008-05/07/content_799527.htm
 - 22 グアテマラ文学者ミゲル・アンヘル・アストゥリアスの演説について、『魯迅先生逝世二十周年記念大会上的報告和講話』（『文芸報』第20号附冊、1956年、27頁）を引用する。

- 23 インド作家マニック・バナジーの文章について、『魯迅先生逝世二十周年記念大会上的報告和講話』（『文芸報』第 20 号附冊、1956 年、29 頁）を引用する。
- 24 南博（1914～2001）は社会心理学専攻で、京都大学卒業、コーネル大学に留学。著書に『体系社会心理学』『社会心理学の性格と課題』などがある。
- 25 南博『社会心理学入門』、岩波書店、1976 年。
- 26 鄒永常「阿 Q・精神勝利法・認知重建」、北京魯迅博物館編『魯迅研究月報』第 6 期、2005 年、29 頁。
- 27 引用は笈文生訳「ロシア語訳『阿 Q 正伝』序および著者自叙伝略」（『魯迅全集』第 9 巻、学習研究社、1985 年、113～114 頁）による。